

美しい夜への誘い

*テロを始め、様々な危機や困難に直面している世界の中にいて私たちは今年も待降節をもってイエスの誕生を記念する日に向かって歩み始めました。

・不安や心配にも必ず穏やかでさわやかな心でその日を迎えたいと夢みる人々は少なくないでしょう。厳しい現実の中でこそ、希望を与え、心に安らぎをもたらし、前方の歩みを照らす光となる「言葉」を人は待ちかねているのではないのでしょうか。私たちはその「言葉」となった神を幼な子の姿を通して迎えようとしています。

・それを契機にして、鮮やかな色のリボンに飾られ、美し

く包装されたクリスマス・プレゼントを人に差し上げるような思いで皆様にこの「司祭のてがみ」を贈らせていただきたいと思います。



*私事で恐縮ですが、「クリスマス」と聞くと、いつもと違っていいほど懐かし^{なつ}く思い出す歌があります。静かで清らかなメロディーとその歌詞は 実にイエスの誕生にふさわ^{ふさわ}しいものだと思います。誰もが知っている歌、クリスマスの季節になると全世界の巷^{ちまた}で鳴り響く歌、大勢の人が口ずさみ、心に残り 感動をもたらし、心の安らぎを与える歌、「きよしこの夜」という歌です。

—皆さんもご存知のことと思いますが、この歌はオーストリアのアルプス山中にある古い村で1818年、ほぼ200年前の12月、イエスの誕生を祝う夜に生まれました。夜中のミサの前にこの村の司祭ジョセフ・モアーは、貧しい家で生まれた赤ん坊の祝福を求められ 行ってみると、その家の光景がイエスのベツレヘムでの誕生と重なったため、彼は今までにない感動を覚えました。帰り道に輝く星空を仰ぎながら彼は、森の静寂の中で神の平和と善意の約束を感じました。深夜のミサの後、彼は書斎に入り、詩を書き始め 夜明けとともに書き終わりました。



クリスマス当日、モアー神父は詩を持って友人であり、学校の先生だったフランツ・グルーバー氏の家を訪れました。友人はその詩を二度も三度も繰り返して読み、早速譜面を書き始めました。—このように「きよしこの夜」の歌が生まれました。

＝今年も心と声をつ一つにして私たちの共同体は全世界の無数の人々と共にその歌を祈りとして幼な子にささげます。どうか

皆さん 悩みや不安、孤独や哀愁のさ中で沈みかかろうとしても一緒にイエスの誕生を祝うために集い、その歌を歌いながら新たに心に希望の火を灯しましょう。



＊火を灯す。その言葉はもう一つの懐かしい思い出を記憶に蘇よみがえらせます。おいしい「Bûche de Noël」(ビュシュ・ド・ノエル)「クリスマスの薪」のことです。—子どもの頃、「クリスマスの薪」に火をつけることはクリスマスの夜のうれしいひと時でした。—忠実と肥沃ひよくのシンボルである果樹の木の枝を切り、その薪を飾り、暖炉の中に寝かせていました。その上にアルコールを注いでから家の一番小さい子はそれに火をつけていました。その火の暖かさと美しさ、燃える薪から散る火花。—火花が多ければ多いほどに次の年の収穫が豊富になると言い伝えられていました。—その光景が心に焼き付いて離れません。その時の楽しみは夜中のミサからの帰り、

母が作ってくれた薪そっくりのチョコレートロールケーキを味わう楽しみと運動していました。火花を見ながらすでによだれの出そうな思いでした。

＊皆様にチョコレートロールケーキを提供することができませんが降誕祭の感謝の祭儀に参加されれば共に心が暖まるひと時を過ごすことができると思います。

＝どうか皆さん、背負っておられる重荷を幼な子の前に降ろし、幼な子が約束された喜びと平和、その「言葉」を信じて 2016 年を共に結ぶために教会の方へ足を運んでください。ともにご降誕のメッセージに耳を傾けようではありませんか。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心にかなう人にあれ」と。(ルカによる福音書 2、14)



～皆さん イエスのご降誕おめでとうございます～